

こここのところ、深海を漂う夢ばかり見ているのだと。

がせいじだい かれ すいえ う こ せいかつ こうし じゅんぢうとくい 学生時代、彼は水泳に打ち込んでいたそとで、今でも泳ぎは得意

その海底に広がる古の都市は、どんな美術館で目にする

ほう こうご な方であると豪語した。

芸術よりも精巧に創られていながら、人工物らしさがないのだ

なや いと せいかつ こうし じゅんぢうとくい その上、これといった悩み事もなく、生活は公私ともに順調

という。

神秘的で、美しいそれらを眺めているうち、ひどく懐かしいよ

まかふしき ゆめ まいような つづ にも関わらず、摩訶不思議な夢に毎夜魔され続け、いよいよ

うな想いに捉われると同時に、ひどく恐ろしい何かを目撃してしま

げんかい とういん じゅしん こと 限界がきたので当院を受診したとの事だつた。

つたような悔ましさに苛まれ、目を覚ますたびに自我が削れてい

ながび あくむ かなら りゆう 長引く悪夢には、必ず理由がある。

く感覚がすると彼は淡淡と語り続けた。

まかふしき ゆめ まいような つづ ひこう 日頃のストレス、悩み、そうでなければ過去に負った心的外傷

悪夢障害の患者は何人も診てきたが、美麗な海底都市を目の

など、それらが原因となつて発現する障害を、児嶋たち医師は

あくまどりうふ おぼ 当たりにして恐怖を覚えるといった類の話は、今までに聞いた

しほうがい こじま いし など、それらが原因となつて発現する障害を、児嶋たち医師は

う夢——何からを喪失し、破壊される光景ばかりが悪夢ではな

あくむ ほか なに う て 「……悪夢の他には何か、症状は？」

ゆめ なに おぼ 溺れる夢、刺殺される夢、奈落へと落ち続ける夢、すべてを喪

じま う て 児嶋がそう尋ねると、男は虚ろな視線のまま、纏ったシャツの

うの こじま ひそ いのだなど児嶋は密かな関心を覚え、カルテに筆を走らせる。

うの こじま ひそ う て そで まく みずか う て 袖を捲つて自らの腕をこちらへと差し出してみせた。

うみ いわおう たず 海、もしくは水に対して何らかの恐怖を抱くような体験があつ

はだあ ひと う て 「肌荒れが酷くて……。これも、悪夢によるストレスでしようか

たのかと一応は尋ねてみたものの、答えは「否」。それどころか

がいき さら う み こじま おも みは 外気に晒されたその腕を見て、児嶋は思わず目を見張る。

腕の皮膚が、鱗状に幾重にも剥がれて硬く固まっていたのだ。

「これは――」

かれいとお通り、ストレスが肌荒れを起すという事象は決して珍しくもない。

だが、しかし。これは果たしてその症状に当てはまるだろうか。

それは肌荒れというよりも、人間から別の生物に成り代わろうとしている変態にも見えて、非常に恐ろしかった。

「……！」

皮膚科も紹介するべきだろうかと兎嶋が顔を上げたその時で

ある。

目の前の患者は、姿を消していた。

代わりに診察室内に鎮座していたもの――それは、忽然と消えた患者の服を纏つた、グロテスクな魚人であった。